

「なま女」の解読をめぐる問題

— 写本表記の批判的処理 —

原 田 芳 起

一 をんな・おんな・女

『万葉集』では、「女」の意には万葉仮名で「乎美奈」と書かれ、「乎等古」と対義語になっている。「嫗」の意の「おむな」はまだ見えない。中古に入って『和名類聚抄』にはじめて「嫗、和名於无奈」と見えているので、「おむな」は文献の上では中古語と見なされる。一方「をみな」も中古に入ると主として「をむな」となって、音が変化することが知られる。

かくて、中古語では、「女」の意の「をむな」と「嫗」の意の「おむな」とが、音韻的にも表記的にも区別されていた。後者の「おむな」が「おうな」と変化した時期がはたしていつ頃のことになるのが問題だが、後世の書写にさまざまな混態が生じたことが推測されるので、判断が困難である。

中古のかなでは「む」「ん」とは通用していたので、「をんな」「おんな」と書かれていても、それは「をむな」「おむな」との間に、音が変わったことを示すものではなかった。ただ「を」「お」だけが語の差異を示していたわけである。

ところが、中古の表記をそのまま伝えた写本がきわめて少ない。『源氏物語』にしろ、『枕冊子』にしろ、中世の書写による変貌を経て今日に伝えられている。その中世の書写で混乱の顕著な現象の一つに、「を」「お」の混同がある。これは、いわゆる定家かなづかいの奇異な性格に強く影響されたものである。平安時代の後期に、「を」「お」の音韻上の区別がなくなり、同じように *wo* に なったと推測されている。つまりア行の「お」がワ行の「を」に併合されたと見られる。しかるに、いろは歌によって固定した字母には、「を」「お」がある。定家かなづかいではこれをアクセントの

高下を示すのに用いようとしたのである。たとえば「をのこ」とも「おのこ」とも書くというように両様を認めるようなことがあるのは、同一語でアクセントに動揺があったことを示すもののようなのである。

前時代の中古において、「をむな」「おむな」が別語として対立していたようなケースでは、「を」「お」の差異で語を区別しようとしないうちの中世のなづかい観では、別語であるという認識が不可能である。『土佐日記』で定家筆の本は貫之自筆の本を写したものであるのに、原本の「おんなおきな」を「おんなをきな」とかなを変えている。定家かなづかいを敷衍したという『仮名文字遣』では「おきな」とあるのに、定家筆の『土佐日記』に「をきな」とあるのは、「おんなおきな」と続けたために「お」が上声になったがためと推測することができる。同じく貫之自筆本に「わらはもおむなも」を定家は本文の字を修正して「わらはもおきなも」としている。なぜそんな語を変更するようなことをしたか。推測は容易ではないが、定家は『土佐日記』に「おむな」を「女」と解して、「わらはも女も」というのは不自然であると判断して改めたと考えることができるように思う。

これと類似した現象として、中古には「おば」「をば」の「お」「を」のちがいが語のちがいを示した。『和名類聚抄』には、「祖母」を「於波」とし、「伯母」「叔母」を「平波」としている。この二語が並んで用いられた時期には、当然表記の区別は保たれていないと思われる。しかるに、定家かなづかいとして見られる前記『仮

名文字遣』では、「祖母」は「おうば」である。そうになると、中古の作品の中の「おば」「をば」を語形の上で識別することが困難になったろうことが考えられる。『拾遺和歌集』の巻九雜下五四五番の歌の詞書にある「祖母」を意味する「おば」を、定家の書写を祖とする天福本系の写本ではすべて「をば」と書いている。

源重之の母の近江のこふに侍けるに　むまこのあつまよりのほりて　いそく事侍て　えこのたひあはてのほりぬることいひて侍ければ　をはの女のよみ侍ける

おやおやおもはましかはとひてましわかこのこにはあらぬなるへし

『拾遺集』のものかなは「おは」とあったと信じられる。それが定家の書写を通過する際に「をは」になったと考えられよう。

『宇津保物語』でも同様の事例が見られる。「楼の上の上」において、右大臣兼雅の妻の一人としてクローズアップされる源宰相の娘は、兼雅に忘れられて一児（小君）を連れて西の大宮に住んでいた。その家に小君の祖母、つまり源宰相の君の母君がいる。写本ではどの本も「をは」とのみあるが、叔母とは思えない。三条殿に一所に迎え取られたことから、その言動からも、この人が故源宰相夫人であり、女君の母であり、小君の祖母であることはまちがいない。その「おば」が現存する写本では「をば」になっている。この点、「拾遺集」の定家本に見られる所と方向を同じくする。ここに定家かなづかひの影を感じる。

本題に帰って、「おむな」「をむな」の対立が、中世の書写によ

って、どの程度乱されただろうかという問題であるが、かなり入り組んだ事態があって、簡明にまとめにくいのであるが、「おむな」「おんな」と表記された「嫗―老女」の意の語が、「をむな」「をんな」に混同、ひとしく「女」と書写した例が多いということは、ほぼ断言してよいようである。

なぜか、中世の写本、そしてそれを転写した近世の写本に見られる用字のくせとして、「をんな」という語は、大多数「女」と漢字化していることを指摘することができる。対義語の「を」とは逆にかな表記が大多数である。たとえば、『竹取物語』で田中大秀旧蔵本（竹取物語の研究・本文篇による）を例にしてみるに、

をとは女にあふ事をす、女はをとこにあふ事をす、
のように、明らかに一つの偏向を示している。

このような用字意識があって、しかも「をんな」と「おんな」とを別語として認定することが困難になっていたのであるから、

おむな・おんな
をむな・をんな——女

のような文字の移動が生じやすい情況にあったと考えられる。

二 女・をんな・おんな

逆に、中世の書写を経過した写本の字面に見られる「女」「をんな」が、はたしてそのまま「女」の意なのか、または「嫗―老女」の意なのか、という方向で、具体例に即して考えてみよう。

「おむな」即ち後の「おうな」であるべく思われる語で、「女」

「をんな」と書かれている例が最も多く見られるのは、『宇津保物語』の写本である。写本の用字面の代表として、前田家本を翻字した古典文庫を観察の対象としてみる。まず、「俊蔭」の巻、阿修羅どもの集うているさまを描いたくんだり、

いみじきをんなおきなこどもむまごなどゐて、かうべをつどへて木をきりこなす

であるが、「女・翁・子ども・孫」では語の並べ方がおかしいことは、すぐ気づく所である。これが板本では「女おきな……」となり、『玉琴』では「嫗翁……」と改めた。『玉琴』の修正は意味的には正しい。板本の「女」では、どうにもかなづかいのずれとして扱うことができないから、「嫗」の意に取りたければ修正せざるをえない。これに対する近代の校注は、『玉琴』に従って「嫗翁……」とするものと、板本に従って「女おきな」とするものと、板本以前の写本の「をんなおきな……」のかなづかいを正して「おんなおきな……」とするものと、三様にわかれている。「嫗翁……」とするのは正しいが、「嫗」を中世の形態の「おうな」とすることに、国語史の見地から難点がある。最後の「おんな」とかなを改めて「嫗」の意と取る処理がやはり一番妥当である。これに該当するのは、校註国文叢書の本と、近くは校註古典叢書（野口元大氏）とがある。

「おむな」と「おんな」とは、中古の文字の体系では別種のものである。/onna/を表わす用字法であったので、「ん」は/m/であった。/N/ではなかった。「む」も/mn/ではなくて/m/であった。

後代の「おんな」よりも「おうな」に近い聞こえを与えたであろうとも思われる。

「おんなおきな」が正しいという断定を支持してくれるのは、「おんなおきな」と連ねる表現が『土佐日記』『宇津保物語』『栄花物語』等に傍例が多いことである。「女」と「翁」では対をなさず、並べて連語化することはできない。『土佐日記』の例はすでに触れた。「宇津保物語」の他の例は、「蔵開の上」の巻、仲忠が京極の旧邸に来て見て、文庫らしい蔵が破壊されずに残っているのを見つけて、これを開けようとしている所に、九十歳にもなりそうなお人夫婦があわてふためいて走ってくるというくだり、

かはらのほどより、とし九十ばかりにて、ゆきをいたゞきたるやうなる女おきな、「まづこゝさらせ給へ〜」となく。(古典文庫九二二頁)

とある、「女おきな」が「おむなおきな」を中世の書写の習慣で書きかめたものであることは、まずまちがいない。『二阿抄』に、
女おきな 明阿曰、女はおうなにて、姫を和名抄にもおむなとよめり。老女のことをいへり。

とあるのは正しい。ただし「おうな」と改めるのは問題を残す。中世の書写において

おむな——女

の写しひがめがあったと見るべきであるから、逆に「おむな」に返すべきである。

同じ巻に、同じ老夫婦が仲忠に対して申すことばに、

かくおそろしき所に、百さいになり待までこの女おきなのみたてまつり侍に、わがくに、みえたまはぬすがたかおはするたまたのおとこのみえたまへるはいみじうかなしきに(九二五頁)

とあるのも同様である。さらに注意しておきたいのは、この例では、老夫婦が自称として用いていることである。「をとこ」や「をんな」は自称に用いることがない。これに対して、「おきな」も「おむな」も自称に用いる例が多いし、また呼びかけや呼び名として用いる例もある。それが自然に受け入れられる所に、「おきな」「おむな」の語性があるのである。

同じ巻、同じ老夫婦をさす表現に、

女おきな、おいの世にみしらぬからばしくうるはしきあやかいねりの御ぞどもをえて(九二六頁)

かのできたりし女おきはまどころにめして、ぬのきぬなどいとおほくたまふ。(九三〇頁)

などと重ねて見える。すべての例が「おきな」はかなで書いているのに、「おむな」はすべて「女」と漢字にしている。前に述べた中世の古典書写の習慣が顕著であることを注意しておきたい。「をんな」を「女」に漢字化する慣性が、「おむな」をも「女」に書いてしまう傾向が確認される。

右に列挙した「蔵開」の諸例は、近代の校注の諸本は、大抵「おむな翁」としている。日本古典文学大系では「オンナおむな翁」としており、校註国文叢書では「女翁」「女、翁」などとした上で前掲明阿説を引いている。「玉松」「玉琴」が「姫おきな」と改訂したことが強

い影響を与えている。

かように見てくると、『宇津保物語』などの現存写本に「女」または「をんな」と書かれている語の中には、「おむな」（嫗）の混入が案外に多いことが知られる。「俊蔭」の巻で、俊蔭の娘が父母に死なれ、乳母にも死なれて、全くの孤獨の境界に沈んだ時、これに仕えてよろずの面倒を見てくれたのは、乳母の従者の老女であった。この老女をさす称呼に、前田家本等の現存写本では、「女」と書いたり、「をんな」と書いたり、「おうな」「をうな」と書いておられる。この事は、これらの写本の用字法では、「女」「をんな」「をうな」「おうな」が等価であることを示している。この老女（楼の上）で「さかの」という名であったことが知られる（の呼称として用いられた限りで、使用回数（古典文庫による）を数えてみる。

女一六回　　をんな一二回

おうな一回　　をうな一五回

地の文の中でも「女」「をんな」「をうな」が同様に現われるし、対話の中で老女の自称として用いられる場合も、「女」「をんな」「をうな」「おうな」が現れる。全く混同して用いられている。

(1) 女「あなさがな。たはぶれにものたまふべきことにあらず、女にはなかくし給ぞ。おうなははやうよりさは見たてまへりつれど、さはきこえざりつるなり。……」（五二頁）

(2) をんな「故おととおはしまさましかば、あやにしきにまつはれ

ておひいでたまはまし」といへば（五六頁）

(3) 女「いで、あなさがなや。……このむしみつは、をんなゆめにみたてまつりたり。……をうなは丹波に待めのわらはむまんとて見たまへしやうは、いとつかひよきてづくりのはりの、み、いとあきらかなるに、しなの、はつりを、いとよきほどにすげて、をうなのきぬにぬひつくつと見給へし、……」（五八頁）

(4) この子五になる年、秋つ方、をうなしぬ。（六〇頁）

まず、「をうな」「おうな」のかなのちがいが語の区別を示すものとして意識されていないことは、(1)(3)(4)の文例を比較すれば明らかである。「女」「をんな」は書写する人にとっては「おうな」「をうな」とは別語と意識されたにちがいないが、転写のある時期に「おむな」「おんな」から「をんな」への写しひがめが生じ、混同することになったと推測される。右に挙げた文例では、原作品では必ずや「おむな」「おんな」（二者は音韻的に同じ）であったのであり、「おうな」も転写の段階で後の発音に移されたもの、「をんな」は中世のかなづかい意識から「を」を選んだもの、「をんな」「女」は語形から誤ったものと見られる。

右に観察した「俊蔭」の巻の諸例は、近代の校注にも、大体正しく処理されているのであるが、「藤原の君」の巻の、滋野真菅物語に登場する老女をさす呼称では、近代の注解が分かれている。ここでは全部の例が「女」となっている。これを本のままに「女」で通しているものには、校注国文叢書・日本古典文学大系があり、「嫗」に改めるものには、有朋堂文庫・校註日本文学大系・日本古

典全書がある。古い所では『玉琴』が「嫗」に改めている。校注古典叢書では、すべて「おんな」に改めている。この「おんな」に改めるのが条理になつてゐることは前に述べた所に照らして明らかである。

すこしまかに吟味を加えてみると、

(1) そのわりにすむ女かゝることをきゝて…… (一八〇頁)

のような地の文では、本のまま「女」としても、大きな都合は感じられないが、この一連の文章の中には、老女が自称として、

(2) 「……ことはな女たばかりきえん。……」 (一八一頁)

(3) 「……女のやどりにみさい給はらん。……」 (一八二頁)

(4) 「……女はおとこ君になんつかふまつりて侍。……」 (一八四頁)

頁)

(5) 「……わがおとどの君、ものなおもほしそ。あが物とおぼしたれ。女し侍らば」とかきてとらす。 (一八七頁)

などとあるのは、謙称として、俗の表現でいうならば、「ばばめが……」などと言ふのに相当する。また対称としての呼び名、

(6) 「おほかたは、女のなかかくは申。くやつ、いままたしりばかりけよ……」 (一八九頁)

などは、憎しみを含んだ「ばばあ」に相当し、

(7) 「わが女どもや、あやまちつかまつりてけり。……」 (一八八頁)

頁)

(8) 「……女ども、みよの中はいかにぞ」 (一八一頁)

などは、好意と尊敬をこめたもので、「おばばどの」にあたるもの

である。「女」ではなくて「嫗」である。

行阿の『仮名文字遣』に、

おうな 嫗名也 老女名也

とある、特に「名」文字が加えてあるのは、嫗を、老女を呼ぶ名であるという意味であると思われる。対義語の「おきな」に「竹取のおきな」のような呼び名の用法があるが、この「おうな」にも「椋垣のおうな」のような呼び名の慣用がある。「女」「をんな」はこの人物称呼としての用法はない。

例文中、(2)(3)は滋野真菅邸の近くに住む老女の自称、(4)(5)は三条正頼邸に仕へる老女ながとの自称、(7)は真菅が老女に対して言う「おばばどの」であり、(8)は真菅邸の近くに住む老女が正頼邸の老女をあがめて言う「おばばさま」である。これらから推して、これを包む地の文の中の「女」も、「おむな」に返すべきであることを確かめられよう。

三 「なま女」に対する諸説

「なま女」という表記で残された語が『宇津保物語』『蜻蛉日記』『源氏物語』などに散見する。「未熟な女」「身分低い女」などと思ひ思いに解釈されている語である。

『大言海』には、

なまをんな(名) 生女 ナマ心アル女。又、未熟ナル女。身分低キ女。

として、『宇津保物語』の例文二つを引いている。引例に「蔵聞、

下」とあるのは旧板本の巻名の誤りを承けたもので、「嵯峨院」と改めるべきものである。

『大日本国語辞典』もほぼ同様で、「なま心ある女。なま女房なる女。身分低き女。未熟なる女」としている。例文は『宇津保』と『蜻蛉日記』。『宇津保』の「嵯峨院」を「蔵開下」の誤った点も同じである。

この「なま女」という語に対する理解は、実際には『源氏物語』の「末摘花」に見える一例の解釈を中心として成り立ってきたようである。本文を『源氏物語大成』によって示すと、(濁点と句読を加える)

ましていまはあさち(わくる)はく人もあとたえたるに、かくよにめづらしき御けはひの、もりにほひくるをば、なま女ばらなども、ゑ

みまけて、「なをきこえ給へ」とそゝのかしたてまつれど、

となる。この「なま女ばら」に対する『大成』の校異を見ると、青表紙本河内本には何もあげてなく、別本系に、

なまおんなとも御物本

なまをんなはら陽明家本

があるだけである。『湖月抄』の活字に鵜刻したものの中に「なま女ばう」としたのがあるが、版本は「なま女ばら」である。大阪の図書出版会社刊の猪熊夏樹増註訂正本(活版)はまだ「なま女ばら」である。有川武彦訂とある本では「なま女ばう」とあり、『湖月抄』の本文をも改訂している。

萩原広道の『源氏物語評釈』は、本文を

なま女ばうなども

として、頭注に、

なま女ばうなどもよき女房もめし使ひ給はぬ故に、なま女房といへり。

としている。本文として「なま女ばら」が正しいのか、「なま女ばう」が正しいのかは、しばらく預かることにせざるをえないが、「なま女房」は『宇治拾遺物語』の巻五の七話に用例があるし、「なま女房」の注としてならば広道の解釈はまちがってはいない。接頭語「なま」の用法から推して、「女房ではあるが、十分に女房と呼ばれるだけの価値を持たない女房」が「なま女房」であることは確かである。広道は「よき女房とはいえない女房」であると解しているわけである。

だが「末摘花」の文の中では、常陸の宮の姫が貧しいからよい女房を召し使っていないならば、どの女房も十分によき女房でないことになる、それでは「なま女房なども」ととりわけるのはおかしい。

それもしばらく措くとして、「なま女ばら」を採用した場合の注釈の方向を大きく見わたして見ると、ほぼ二つにわかれている。一つは「年若い女たち」「若い女房たち」と解する類で、「なま」に「未熟」の意を汲み取ろうとしている。他の一つは「つまらない女たち」「いい加減な女房たち」と解する類である。これも「なま」に「未熟」「不十分」の意を見ようとしているようである。これらの解釈についても、やはり「なども」が何となく気がかりである。

どこかにすきま風が吹きこんでくるような気がする。

『蜻蛉日記』の例を見てみよう。

れいの人は、案内するたより、もしは、なま女などしていはす
ることこそあれ、これは……(上巻)

「柏木のこだかきわたり」からの求婚のあやしさを記したくんだり
である。この文中の「なま女」を日本古典文学大系には「青女房」
と訳し、『全注釈』には「いい加減な女房」と訳し、「身分がはか
ばかしくなく、年若で未熟な侍女」と注してある。

『宇津保物語』の用例は、「嵯峨院」「菊の宴」「初秋」「国譲
の下」と都合四回ある。その例文と、これまでの扱いを見る。

みやすどころ「げにかやうのなま女こそ物たばかりはすれ。た
ばかりきこえむや」などてわらひたまふ。(嵯峨院)(三三四
頁)

あて宮の結婚問題について、その母の大宮と姉の女御とが話し合
っているくだりである。この女御が自称する「なま女」の意味に言
及した注には、

生中なる女(校註国文叢書)

生心ある女(校註日本文学大系)

ろくでもない女(日本古典全書)

いい加減な女(校注古典叢書)

第二例、

女御の君「なまをうなこそさやうの事はすれ。たばかりきこえ
んかし。おとゞはいかゞきこえ給らん」(菊の宴)(五七九頁)

これはいうまでもなく、「嵯峨院」と重複する部分であるが、表
記がかなで「なまをうな」とある点に重要な問題が感じられる。
「女」の意の「をんな」に「をうな」という語形がはたしてあった
であろうかということである。だから、諸注の本文の形と注を抄記
する。

なまをうな―生中の嫗、卑下して言へり。(校註国文叢書)

なまをうな
生女(有朋堂文庫)

なまをうな
生女―なまなかの心ある女(校註日本文学大系)

なまをうな
生女―ろくでもない女(日本古典全書)

なま
生女―未熟な女(日本古典文学大系)

第三例、

おとゞ「あな見ぐるしや、かたすみにこもりゐたるなまをんな
のきるべき物かは」などのたまひて、(蔵開―下)(一一七〇
頁)

ここに「おとど」とあるのは仲忠をさす。仲忠が女一の宮に、源
中納言からの贈り物のおすそわけについて話をしているのだが、
「なまをんな」とあるのは、母の内侍のかみをさしている。諸家の
注は前の二例とほぼ同様である。第二例で異色ある扱いを見せた校
註国文叢書には、本文を「なまをんな」としてあるだけで注がない
ことだけ特記しておく。

第四例、

くほてのふたに、なま女の手にて「けふならん、からうじて一
ついのりつかひして、くずにはなどか。

ねぎごともしかかずなりにしにかさまには神のおほかるくぼてそてとぞ」

とあるを、(国譲―中) (二三八六頁)

難解な文であるが、贈り物に添えた文をわざと「なま女」の筆蹟にして贈り主をわからないようにしたという点は明白である。この

「なま女」に対する注、

初々しき女(校註国文叢書)

未熟な女(日本古典文学大系)

などがあるだけである。

四 「なま女」の正体を考える

「なま女」の「女」という写本表記は、この稿の一・二で考えたように、中古の「おむな」(嫗)の写しひがめである可能性も半分はあることを考慮に入れておかなければならない。三で考えた諸例は、「なまおむな」即ち「老女になりかけた女」の意であったとして、説明がつかなくはないものばかりである。その中で、『宇津保』の第二例は「なまをうな」とあり、定家かなづかいのありかたから考えると、写し手も「嫗」を意図しての表記であつたらうと思ふ。

一方、接頭語的用法の「なま」の意味機能を考えると、「なま嫗」は自然に了解できるが、「なま女」という語構成には、どこか不自然なものを感じさせるふしがある。この接頭語「なま」には、名詞に冠して複合名詞を作るものと、形容詞類に冠して複合形容詞

類を作るものとにわけられるが、前者、複合名詞を構成する場合も、下接する名詞の持つている形状を限定するのであって、形容詞類に冠する「なま」の意味機能と全く異なる所がないのである。たとえば、「なま学生」の場合、「なま」は「学生」のあるべき状態が十分でなく半端であることを意味する。「なまわかんどほり」は、「わかんどほり」ではあるが、あるいは母方が卑賤であるとか、家が貧困であるとか、あまりりっぱな「わかんどほり」ではないということを示す。

なまおきな(伊勢物語一一四段)

なまわかんどほり(源氏物語―夢浮橋)

なまきんたち(源氏物語―東屋)

なま孫王(源氏物語―椎が本)

なま親族(蜻蛉日記・狭衣・桧垣嫗集)

なま学生(大鏡)

なま宮仕へ(伊勢物語八七段)

なま宮服(狭衣)

なま受領ずりやう(源氏物語―蓬生)

なま女房(宇治拾遺―五―七)

中古の文学に用例のあるものを右のように並べて見ると、「なま」に下接している名詞は、高下の段階のあるもの、言うならばピンからキリまであるものである。『源氏物語』には、「なまなまのかんだちめ」「なまなまのはかせ」(帚木)のような連語形態のものがある。そのまま「なまかんだちめ」「なまはかせ」となり得よ

う。つまり「なま何」は意味的には「なまなまの何」であると考えられよう。そしてその「なまなま」は、十分それになりきれない、半端なさまを表わし、形容動詞としての活用も持つ。「なまなまの男」と言わなかったように、「なまなまの女」とは言えそうにない。女ではあるがきわめて不完全にしか女でないという考えかたは、おそらく成立しなかったであろう。

「なま」が「未熟な」と置き換えても通りそうなのは、「なま学生」や「なま女房」ぐらいのものであろう。「なま孫王」や「なま受領」の類には適用できない。全体を通じて統一的な意味づけを試みれば、「なま何」の「なま」は、その「何」として半端であることを表わすと見られる。男であり女であることには身分や年齢や賢愚の差は条件にはならないのだから、「なま女」が、身分の低い女とか、年齢の若い女とか、知的に未熟な女とかを意味させることは、「なま何」の意味的構造からこれだけが除外例となってしまう。

中世以後の写本に「なま女」「なまをんな」「なまをうな」と書いてある語は、「なまおむな」であると見るべきではないか。『伊勢物語』に見える「なまおきな」と並べることのできる語だと見るべきではないか。

「なまおきな」という語は、『伊勢物語』の一一四段に見られる。

むかし仁和のみかど芹川に行幸したまひける時、なまおきなの、今はさることになく思ひけれども

「なまおきなの」の一句を欠く本（天福本）もあるが、中古語彙の中に入れるべき語であることはいうまでもない。もはや若者ではない。一応老人と呼ばれているが、さりとて全くの老人という程ではない。それを「なまおきなの」と言ったのである。芹川に行幸にこの男が鷹飼として、候うたというのだから、鷹狩を催されたのである。そうした若者にふさわしい役に奉仕するには気がとがめたというのである。

この「なまおきな」と対をなす語として、「なまおむな」を置いてみる。それは若い女ではもはやなくなつて、「おむな」即ち老女のなかまに入るのであるが、「おむな」として十分な人生経験を積み、世の中を見尽くし知り尽くした女人というには、まだまだ足りない。年寄としてはまだ若い、若人としては年を取りすぎている。そうした女性が自分自身をさす謙称としても用い、他からの卑称としても用いたものであつたろう。『宇津保物語』『蜻蛉日記』『源氏物語』に見られる「なま女」は、実は中世の書写の間に正体を見失われたもので、「なま姫」であつたのではなかったか。

これまでのわれわれは、『源氏物語』の一例の解釈から得られたものを尺度として、他の作品の例を処理してきた。その『源氏物語』の一例について、最初に見られる注解は、前に触れたように萩原広道の『評釈』であつたが、それは本文を「なま女ぼう」としてゐるのである。この「なま女房」に対する解釈をほぼそのまま「なま女」の解釈に引き継いできたかに思われる。「年若い未熟な女」「身分の低い女房」という、方向を異にした解釈は、ともに「なま

女房」への解釈を移したものである。

そこで、順序を変えて、初出の『宇津保物語』の四例の考察から出発してみる。まず、「嵯峨院」「菊の宴」の例文は、重複箇所であるので、一括して観察した方が便利であろう。まず、表記を見ると、

げにかやうのなま女こそ物たばかりはすれ。(嵯峨院)

なまをうなこそきやうの事はすれ。(菊の宴)

となっており、この文字の面からも、「なまおむな」が原形であることは察せられよう。

文の内容から考察してみても、「なま嫗」の方が適していると思われる。「かやうのなまおむな」は仁寿殿の女御自身を多少謙退して称している。女御はこの時三十三歳ぐらいか、もはや若い人ではない。そろそろ老人のなかまに入る年頃と、当時の女性の年齢感情では見られたらうし、特に謙退してならば、言って不自然でない。さらに重要なのは、女御自身だけをさすのでなく、私のようなすこし年寄になった女が、このような縁談のよしあしを考えることができるものだ、と言っているのである。「物たばかり」と言ったのは、結婚を取りまとめるためのはかりごとを意味する。「菊の宴」に「さやうの事」と言ったのも同じ事である。婚姻の仲媒とか、相談役とかは、相当地世の中を知っている者でなければならず、若い未熟な女の適役ではありえない。「菊の宴」では「なまをうなこそ」とあるので、世間一般の実情として言っているのであるから、女御の謙称という意味は表面には出ていない。

『宇津保物語』、「葺開の下」の第三例は、中納言仲忠が母の内侍のかみを女一の宮に対して謙退して称しているのである。この時仲忠二十七歳ばかり、母君は四十二か三ぐらいであろう。若いとは言うはずもなく、身分低きとも言いそうもない。母は三条の家に引きこもっている初老の女、こんな華麗な着物を着られる者ではないと言ったものであるらしい。表記も「なまをんな」とあり、「なまおんな」への距離もより近い。

「国譲の中」の第四例、文辞の続きを辿ることも容易でない程本文が乱れているが、推定できる範囲で文字の錯誤を正してみると、次のようにならうか。

くぼてのふたになまおむなの手にて「けふなむからうじて一ついのりつるひらで、かずにはなごか。

ねぎごともしかきまには神のおほかるくぼてそてとぞ

これでも歌意はまだよくわからない。それでも、全体の文意としては、あて宮の昔の懸想人の一人が、名を隠して、里邸にあるあて宮(藤壺の御方)に物を贈ってきたのである。贈り主を知らせないように「なまおむな」の筆蹟で書かせたふみを添えてある。年若い女であると解しなければならぬことはなく、すこし年を取った「おとな」の女房のと考えた方が、ずっと自然であると思われる。

次に『蜻蛉日記』の例は、『宇津保』の第一例第二例と似ている。求婚の仲媒役に初老の女性がはたらくことが多かったということは、昔も今と似た所があったらうと思う。ことに中古のような結

婚風俗においては、姫などいう若い娘に直接近づく機会には男性側にはほとんどないし、求婚する男性は、自分の近づくことのできる女性で、先方にも出入りして、ある程度信頼されるような人物を仲媒とすることになる。年少の女房や童女をもつてするふみづかいとはちがうように思う。求婚の申し入れとなれば、ふみを伝える女が、男の側のことを語って、ある程度了解を得させるような役もするであらう。「なまおむなし」は言はすることこそあれであるべく、求婚の仲介役に、年若い女房だとか、身分の低い女房がつとめるのが通例であったと考えるべきものではあるまい。

仲介者として懸想ぶみを伝えたり、「物たばかり」をしたりする人物の具体例を、物語の中から拾ってみる。『宇津保物語』で、源宰相実忠はあて宮づきの兵衛の君を、藤侍從仲忠は同じく孫王の君を頼む。右大将兼雅は同じつかさの中將祐澄があて宮の兄であるからそれを頼んだし、良佐行正は学問の弟子であるあて宮の弟の宮あてを責めてふみづかいにする。この類は『蜻蛉日記』に言う「案内するたより」にあたる。三春高基はあて宮の御方に仕える宮内の君を呼んで相談し、滋野真菅は近所に住む老女に相談し、あて宮の兄忠澄のめのとに仲媒を頼む。これは「なま嫗」が「物たばかり」する例であり、「なま嫗」などして言はする例である。

右の宮内の君が、高基の相談に答えた所などは、世にいうなかうどぐちである。

げに一所ものし給ふを（独身デイヤラッシュナルノニ）、殿のきんだちのあまたおはしますを、さてものし給はば（結婚ナサレタ

ラ）よからめど、さやうにおとなしき住まひし給ふべき（殿ノ北ノ方トナラレルヨウナオトナビタ方）なむおはしますまぬ。このところにあたり給ふは、誰も誰もきこえ給へど、おぼしめし定めずなむ。さはありとも、かくなむときこえて御返り事は。（藤原の君）

真菅の近所に住む老女は、依頼者に調子を合わせて言う。

しかなり。何かは聞こしめさざらむ。世界は一にとぞ。事はなほ嫗^{おむなし}たばかりきこえむ。父おとどにもなきこえ給ひそ。

「世界は一に」とは、「世界の事はすべて財宝の力によって定まる」という当時の諺だと思われる。真菅をおだてて利を得ようとするものである。

「国讓の中」で、女二の宮によこしまな恋慕をする男性たちの暗躍を描いているが、そういう男性から物をもらって手引きをしようとする女房というのは、比較的年を取ったものが多かったようで、その中で宰相中將祐澄の便宜をはかっていたのは、女二の宮の乳母であった。二の宮たちが桂の別荘に避暑に來ている機会をねらって忍び入ろうと、乳母に連絡を取る。乳母は仲忠らが動きを察知して、断念させる。その返事は、

かしこまりてうけたまはりぬ。……のたまはせたる事は、あな恐ろしや。宮におはします時よりも、宮たち垣のごとおはしますひて、夜は御めぐりにおはしますまふれば、これかたに、え近くも参らずなむ。いとかたじけなく、旅におはしますますなるを、早帰らせ給ひぬ。人にけしき見えさせ給ふな。さて、た

まはせたるは、あなかたしけなや。かく御みくしげ匣げ殿どのをせさせ給ふをなむ。いかでこの功に女まうけさせたまつりてしがなとぞ人知れず。まめやかには、宮に渡らせ給ひなむ。(国護の中) というのであった。「国護の下」にも、女一の宮の乳母の左近が、右の二の宮の乳母の陰謀について仲忠に告げる話書かれています。

『源氏物語』の「若菜の下」、女三の宮の降嫁について、「おとなしき御めのとたち」を召して意見を申させられるくだりがある。この時、乳母たちが申した所は、

中納言(薫)は、もとよりいとまめ人にて、年ごろもかのわたり(雲居の雁)に心をかけてはかざまに思ひ移ろふべくも侍らざりけるに、その思ひかなひては、いとどゆるぐかた侍らじ。かの院(源氏)こそ、なかなか、なほいかなるにつけても、人をゆかしくおぼしたる心は絶えずものせさせ給ふなれ。その中にも、やむごとなき御願ひ深くて、前齋院などを今に忘れがたくきこえ給ふなれ。(若菜の下)

というのであった。これこそ「物たばかり」する「なま嫗」の典型的な例である。律気者よりも好色な男性の方が、女として見れば頼もしいという、かなり主観的な男性観であるが、適度に愛をかけてくれる人であれば、女としては幸福である、一夫多妻が避けがたいものならば、色を好む男性の方が、愛する心がゆたかだという好色論がそこには見られる。女房という階層の女性たちには、こうした感じ方が強かつたろうと思う。

この乳母たちの一人が、その兄の左中弁に話して朱雀院の意向を

源氏にそれとなく伝えることを頼む。左中弁はかなりあぶなく思つて、「いかが、憚らるる事ありてなむ覚ゆる」と言ったのを、乳母は朱雀院に対しては、「六条の院は悦んで承諾されるだろうと左中弁が申しました」と申して、婉曲にお勧め申したのであるが、その折の乳母の意見の要はこうであった。

いかなるべき事にかは侍らむ。程々につけて人のきはぎはおぼしわかまへつつ、ありがたき御心さまにもし給ふなれど、ただ人だに、またかかづらひ思ふ人立ち並びたることは、人の飽かぬ事にし侍めるを、めざましき事もや侍らむ。御後見望み給ふ人々はあまたものし給ふめり。よくおぼし定めてこそよく侍らめ、限りなき人ときこゆれど、今の世の様とは、皆ほがらかにあるべかしくて世の中を御心と過ぐし給ひつべきもおはしますべかめるを、姫宮は、あさましくおぼつかなく心もとなくのみ見えさせ給ふに、候さぶらふ人々は仕うまつる限りこそ侍らめ、大方の御心掟に従ひきこえてさかしき下人も靡よきさぶらふこそ、たよりあることに侍らめ。取りたてたる御後見ものし給はざらむは、なほ心細きわざになむ侍るべき。

このような思いはかりをするには、今の世のさまも知り、客観的な判断も下し得る種類の人物として、若くもなく、さりとてひたぶるに老いこみもしていない、「おとなしき」「めのと」クラスの女性か、一番適していたであらう。

『宇津保』の仁寿殿の女御が、「かやうのなまおむなこそ」と言つた自信には、その辺の消息が察せられる。

写本の「なま女」の文字通りに受け取りがたいことを示す最も顕著な例は、右にあげた『宇津保物語』の諸例であるが、当然それを推して『蜻蛉日記』『源氏物語』の「なま女」にも及ばされなければならぬ。『蜻蛉日記』の例については、『宇津保』の類似例とあわせて、原態は「なまおむな」であることを指摘した。

『源氏物語』の一例については、三の項で「なま女」に対する注釈の諸説を記した。文字通り「なま女」としての解釈に不安があることはそこに記した。「なま女」では複合語の構成上に難点があることにすでに触れてきた。そこで、この「なま女」は、もと「なまおむな」であったもので、中世に写しひがめたものであるとして、文意を考えてみる。

なまおむなばらなどもゑみまけて「なはきこえ給へ」とてそそのかし奉れど、あきまじう物づつみし給ふ心にて、ひたぶるに見も入れ給はぬなりけり。

名高い源氏の君が姫君に言い寄って来られたとあって、予想しただけでも大にこにこになって姫に男君に会うことを観める、それは「めのとだつ老い人など」とあとの節に見えるような女房であろう。すこし年の寄った女の意で「なまおむな」と言ったとすれば、無理のない文意になると思う。

「なまおきな」が初老の男性をさしたごとく、「なまおむな」は初老の女性をさしていたと見るべきである。これは年輪的なものが主として意識されている。身分の高下とは関係はあるまい。接頭語「なま」の意味の特殊性は上に考えたごとく、「なま」自体に未熟

だとかつまらないとかの評価的概念を含まず、下に接する形容の語や、名詞の包含する状態性の、程度がほんのわずかであることを表わすのが常である。

「おきな」とか「おむな」とかは、それが自称に用いられたり、身内の者に関する謙称と用いられたりする時は、世間的通念としての翁媪とはかなり離れていることが多い。年輪的には壮年である男性が、身ずからを「おきな」と称する類のことは、現代にでもあることである。「なまおきな」「なまおむな」についても同様である。三十をすこし過ぎた女御が「かやうのなまおむなこそ」と言ったのはそれである。その点で不審とすべきではない。

(昭和47年8月稿)

追記

校了の頃になって、『日本霊異記』中巻第十六話の訓釈に、「媼於于那」とあるのに気づいた。「於于那」という語形が、右の訓釈の記された時期には存在したことが知られる。真仮名を用いているから、おそくとも平安上期であろう。しかし、『和名抄』の「於无那」が原形、「於于那」は転化であると信ぜられる。かなぶみで「おむな」が主流をなして、それが中世の書写で「をんな」、更に「女」と誤られたという、本論の推測は動くまい。